

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

卒業研究抄録集(看護学科) (2016.12) 平成28年度:11-12.

看護学生から見た心に残る看護場面とは

倉元 弥月, 後藤 清子

看護学生から見た心に残る看護場面とは

倉元弥月 後藤清子

(指導：阿部修子)

<緒言>

1. 背景

A大学の看護学生は1学年のころから看護についての講義を受け、2学年の11月に初めて患者を受け持つ実習を行う。3学年の11月からは4学年の7月にわたるまで領域別の実習を行う。これらの実習において看護学生は、何が良い看護であるのか、より良い看護とはどういったものかを常に考えながら実習を行っている。また、学生間で実習中に心に残った場面を共有することも多い。しかし、実習の学びに関する研究¹⁾⁴⁾や、学生への支援内容の研究²⁾、看護の動機付けを高める要因³⁾についての研究はされているが、実際に学生にとってどのような看護場面が心に残っているのかについて調査している文献は見つからなかった。そのため、実際に看護学生にとって心に残る看護場面とはどのような場面であるかという疑問があり、看護学生から見た心に残る看護場面について調査を行い、どのような看護場面が心に残っているのか、それらには何が共通しているかを明らかにしたいと考えた。これらの調査により、どのような看護場面が学生の学びにつながる傾向があるのかわかると考えられる。

2. 研究目的

心に残る看護場面に對し、看護学生がどのように思っているのか、なぜ心に残っているのか共通点をみつけ、心に残る看護場面とは何かを明らかにすることである。

<方法>

1. 対象

領域別看護学実習を終えたA大学看護学科4年生54名

2. データ収集方法

領域別看護学実習終了後の平成28年9月にアンケートを実施した。調査は研究の目的や内容、倫理的配慮を説明し、調査用紙を配布した。調査用紙は自由記述、選択での回答とした。

3. 質問内容

自分が行った、もしくは自分が見た場面で心に残った看護場面の有無とその領域、心に残った理由、心に残った場面や実習からどの程度看護観が深まったかで構成した。

4. データ分析方法

自由記述の看護場面についてはコード化・カテゴリ化した。見た看護場面の自由記述の回答の中で明らかに自分が行った場面のは移動した。看護観の深まりについてはクロス集計を行った。

5. 倫理的配慮

調査用紙配布時に、研究の目的や趣旨、任意での回答であること、研究への参加は自由意志であり、不参加でも不利益はないということを説明した。研究への同意は回答をもって得られたこととした。調査用紙は、封筒に入れて提出とした。プライバシーの保護に努め、匿名性を確保した。調査用紙については研究終了後に裁断・破棄することを説明した。

<結果>

調査用紙は52名に配布し33名から回答があり、回答率は63.5%であった。

自分が行った中で心に残った看護場面があると答えた人は31人(93.9%)、ないと答えた人は3人(6.1%)であった。自分が行った看護場面の自由記述があったのは30人(90.9%)であった。自由記述のカテゴリーは8つ抽出され、表1に示した。

表1 自分が行った中で心に残った看護場面のカテゴリー

カテゴリー	コード数 (%)
患者からの励ましの言葉、感謝の言葉	9(18.8%)
個性のある看護が行えたという実感	9(18.8%)
患者に寄り添うことができたという実感	8(16.7%)
実習の難しさに気が付いたこと	8(16.7%)
患者の笑顔と涙	6(12.5%)
患者の可能性に気づくことができたという実感	4(8.3%)
患者の状況に合わせたコミュニケーションの大切さについて学ぶ	2(4.2%)
実習の反省、後悔	2(4.2%)

自分が見た中で心に残った看護場面があると答えた人は12人(41.4%)、ないと答えた人は17人(58.6%)であった。自分が見た看護場面の自由記述があったのは40.0%であった。自由記述のカテゴリーは6つ抽出され、表2に示した。

表2 自分が見た中で心に残った看護場面のカテゴリー

カテゴリー	コード数 (%)
看護師、助産師の患者への声かけ、思いを傾聴する姿	6(35.3%)
患者の個性に合った看護ケアの実施の場面	5(29.4%)
医療スタッフ間の連携が徹底されているという気づき	2(11.8%)
看護師自身の持つ力	2(11.8%)
信頼関係を構築することの大切さ	1(5.9%)
不適切な場面からそのような看護師になりたくないと思った	1(5.9%)

心に残った場面による看護観の深まりに對し、非常に深まった人が6人(20.7%)、深まった人が22人(75.9%)、普通の人が1人(3.4%)、深まらなかった人は0人であった。

実習を通しての看護観の深まりに對し、非常に深まった人は14人(41.2%)、深まった人は17人(50.0%)、普通の人3人(8.8%)、あまり深まらなかった、深まらなかった人は0人であった。

自分が行った心に残った看護場面の有無とその看護場面による看護観の深まりのクロス集計では有意差があった。

自分が見た心に残った看護場面の有無と実習を通しての看護観の深まりでは、有意差があった。

<考察>

1. 自分が行った中で心に残った看護場面

「患者からの励ましの言葉、感謝の言葉」、「患者の笑顔と涙」は、実習の不安や緊張がある中で、患者からの感謝の言葉や笑顔、涙があったことで学生が嬉しさを感じたためであると考えられる。また、患者の言葉によって学生自身が励まされたため心に残ったのではないかと考える。

「個別性のある看護が行えたという実感」、「患者に寄り添うことができたという実感」、「患者の可能性に気づくことができたという実感」は、学生が看護援助を行うことで、患者の状態が改善したり、何らかの良い反応が見られたため個別性のある看護ができたことを実感を持ったこと、患者とのかかわりが適切かわからずにかかわっていたが、患者の反応から寄り添うことができていたと実感できたため、心に残ることが多かったのではないかと考える。

「実習の難しさに気が付いたこと」、「患者の状況に合わせたコミュニケーションの大切さについて学ぶ」、「実習の反省、後悔」は、患者とのコミュニケーションが難しく、どのようにかかわりを持つかに悩んだことや、患者からの拒否にどのように対応することが良いかということが難しく、学生が自身の課題に気づくことができたためであると考えられる。

学生が行った看護に対し患者からの反応が見られ、自分の成長を実感し満足感や達成感が生まれることや、患者からの感謝の言葉によって学生の実習に対する意欲の向上につながっているとされている³⁾。本研究でも学生自身の成長の実感や意欲の向上は、心に残る要因の一つではないかと考える。

2. 自分が見た中で心に残った看護場面

「看護師、助産師の患者への声かけ、思いを傾聴する姿」は、学生が患者とのかかわりに対しできなかったことや悩んだことがあった中で、看護師の患者とのかかわりを見て、どのようなかかわりができるのか学生自身が気づくことができたためであると考えられる。

「患者の個別性に合った看護ケアの実施の場面」は、学生自身は気づくことができなかったが、看護師が患者に必要なケアを見出しケアを行っていたことや、患者の希望を叶えるために、医療として必要なケアのみではなく、一人ひとりの生活スタイルを取り込んだ看護ケアを考え行うことの重要性を学ぶことができたためであると考えられる。

「医療スタッフ間の連携が徹底されているという気づき」は、講義で連携が大切であるということは学んでいたが、実習で実際に行われている様子を見て改めて学びが深まったためと考える。

「看護師自身の持つ力」は、業務に忙しいながらも、患者に対し温かさをもって対応していたところ

に凄みを感じたためであると考えられる。

「信頼関係を構築することの大切さ」は、信頼関係があったからこそ、患者がケアを受け入れたという場面を見たため、信頼関係の構築は看護を行う上で大切であると気づいたためと考える。

「不適切な場面からそのような看護師になりたいかと思わなかった」は、ケアを実施している際、不適切な手技を行っていただけではなく、患者・家族に対し、不適切な対応をとっている姿を見たためであると考えられる。

学生が指導者や教員に指導されてよかった内容や状況についてはわからないことや困っていることに関する指導や患者理解のための助言であるといわれている²⁾。そのため、見た看護場面で心に残りやすいものは、学生自身ができなかったことや悩んだことがあった際、看護師が実際に実践している看護場面を見ることができたことで心に残りやすいのではないかと考える。

3. 看護観の深まり

今回の調査では、心に残った看護場面や実習を通して、学生の看護観が深まっていることが分かった。

自分が行った看護の中で心に残った場面がある人は、心に残った看護場面を通して看護観が深まる傾向にあった。そのため、心に残った学生自身が行った看護は、様々なことを考えながら試行錯誤して行うため、看護観が深まりやすいのではないかと考える。

自分が見た看護の中で心に残った看護場面がある人は、実習を通して看護観が深まる傾向にあった。そのため、実習を通して看護観は深まるが、自分が行った看護の中で心に残る看護場面から看護観が深まる割合が大きいのではと考える。

<結論>

自分が行った看護場面では、今までの自己の学びを応用し実践に活かし、学生自身が看護を行うことができたことと実感したことや、患者からの反応が見られたことが心に残りやすかったと考える。

自分が見た看護場面では、看護師の患者とのかかわりに凄みを感じた場面や、不適切な場面を含め、看護師の患者とのかかわりから気づきがあり学びが深まった場面が心に残りやすかったと考える。

自分が行った看護場面と見た看護場面の自由記述の回答率に大きな差があったことから、自分が行った看護の方が心に残りやすい傾向があった。

<文献>

- 1) 糸井志津乃, 上松恵子(2013): 小児看護学実習での発達外来実習の学び, 健康科学研究, 第6号, 37-42.
- 2) 榎本朋子, 田邊美津子, 中西啓子(2013): 臨地実習中の看護学生への支援内容の検討—実習中の学習と指導の調査から—, 川崎医療短期大学紀要, 33号, 9-15.
- 3) 山内木綿子, 大西香代子(2014): 看護学生と看護師の看護に対する動機づけを高める要因の明確化とその相違, 日本健康医学会雑誌 23(2), 97-109.
- 4) 富澤理恵, 新井祐恵, 久津見雅美ら(2012): 臨地実習を通した看護学生の学びの評価と A 病院における実習過程評価, 千里金蘭大学紀要, 9号, 57-65.